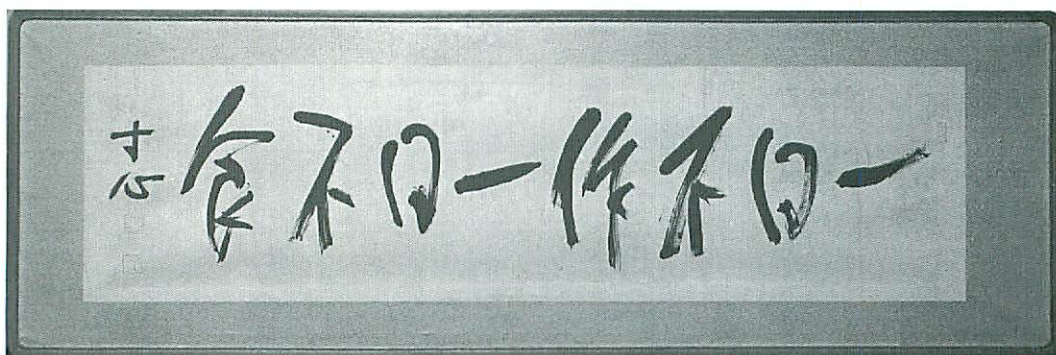


学校所蔵の書 拝見

金沢大学 学校教育学類蔵



「一日不作一日不食」(いちじつなさざれば、いちじつくらわず)
西田幾多郎書 年代未詳 紙本扁額 本紙 130×35 cm

西田幾多郎(1870-1945)は、河北郡宇ノ気村出身の哲学者。「寸心」の号は、明治34年に雪門禅師から与えられた。その著『善の研究』(1911)は近代日本における最初の独創的な哲学書。

金沢の第四高等学校を経て東京帝国大学文科大学哲学選科に進み、卒業後は金沢四高教授、学習院教授等を経て、1910年(明治43)京都帝国大学文科大学助教授。

「一日不作一日不食」は、唐の禅僧、百丈懷海(ひやくじょう えかい)の教え。

『わが父西田幾多郎』(西田静子、上田弥生著)によれば、「私の家では昔は客間に、私の娘の頃は母の室の床に、いつも「一日不作一日不食」という軸が懸かっていた。本当に私達の父は一日考えざれば喰はざる様な人であった。」とある。

『第24回石川県書写書道教育研究大会集録』の発刊によせて

石川県書写書道教育連盟会長
第24回石川県書写書道教育研究大会長
宮下 孝晴

立春は過ぎたとはいえ、急ぎ足で春がやってきてくれるわけではありません。大会当日の2月14日も朝から雪の舞う、冷え込みの厳しい日となりました。そんな寒空を見上げながら、「最悪の大会」を避けるにはどうしたらいいか、私はあれこれと思索をめぐらしていました。最悪の事態とは、研究協議会 part II で計画していたパネルディスカッション「大学生とともに考える」に参加してくれると約束していた金沢大学の学生5名（うち2名は大学院で学ぶ現職教員）が来てくれなかった場合のことです。この新企画は昨年の大会で大見得をきってスタートしただけに、早くも2年目にして「大学生不在のまま考える」という惨めな結果には終わらせたくはありませんでした。今回はすでに相談役の法水光雄（福井大学）教授、押木秀樹（上越教育大学）教授がともに御都合で欠席されるという連絡があったばかりか、事務局の幹部からもやむを得ぬ事情での欠席があり、非常事態の打開策を密かに用意して会場に向かいました。

大会運営にあたった事務局にも私が抱いていたと同じ危機感があったようで、それが功を奏したのかどうか判断は難しいのですが、大方の予想に反して万事が順調に進展し、大会は成功裏に幕を閉じることができたかと自負しています。決して自画自賛ではなく、参加者の方々のアンケートに書かれている感想からも、今大会での協議が有意義で充実したものであったことは間違いありません。すべてが意図したことではなく偶然にも助けられた点もあるので、自画自賛はほどほどにして、わずか3時間足らずの協議会を充実して展開できた事実を冷静に分析し、次回以降の企画や進行に反映させたいと思います。とはいえ、紙幅にゆとりもないので箇条書きでまとめてみますが、協議会に参加した方以外には舌足らずな表現であるかもしれません。ぜひ、この「研究大会集録」を丁寧にお読み下さるよう、お願いします。

- ①金沢大学の折川司教授のコーディネートで中川晃成、岩田稚子、水上真由美の諸先生が学校教育（小中高それぞれ）の現場に即した授業を展開している「書写書道基礎」を受講する大学生たちが、協議会のテーマをよく理解してパネルディスカッションに参加し、意欲的に体験や意見を述べてくれたこと。
- ②研究協議会 part I で田中学先生が報告してくれた「第38回日本高等学校書道教育研究会」（静岡大会）の内容を整理するにあたり、研究協議会 part II のパネルディスカッションを踏まえて、議論が発展的に展開する配慮をしてくれたこと。
- ③司会進行役が常に議論の方向性を整理しながら、限られた時間を有効にパネリストに配分して「議論の停滞」（渋滞）を巧みに交通整理したこと。
- ④昨年参加された岐阜市立三輪南小学校の戸崎浩志先生のみならず、岐阜女子大学の杉山博文理事長、同教育支援センターの久保田智子先生という他県からのゲストの方々、新たな息吹と刺激を与えて下さったこと。
- ⑤大学の教員養成課程での問題に絞り込んで議論を進めて2年目を迎えたことで、議論すべき問題の輪郭がしだいに明らかになってきたこと。

今回の企画を「序章」として、次年度からはテーマを絞り込み、しばらくは継続的に学生参加型パネルディスカッションを軸として、書写書道教育問題の核心に迫るような研究大会を目指していきたいと宣言した前大会での約束はしっかりと果たされました。いずれにせよ、3年目を迎える次回は正念場、プレッシャーをかけるつもりはありませんが、今大会の成功を自信に、もう一歩前へ踏み出しましょう。

最後に、平成25年度における各種の活動や研究大会の開催に多大のご尽力をいただいた実行委員、ますます充実してきた本誌の編集・刊行、また本連盟の運営に携わってこられた役員の方々に心から感謝の意と敬意を表します。

目 次

1. はじめに -----	1
2. 第24回石川県書写書道教育研究大会要項 -----	3
3. 研究協議会Ⅰ報告 -----	7
「書写書道教育における今日的課題～全国の実践を受けて～」	
◇第38回全日本高等学校書道教育研究会（静岡大会）報告	
田中 学（石川県立金沢中央高等学校）	
研究協議会Ⅰのまとめ	
4. 研究協議会Ⅱ報告 -----	15
「大学生とともに考える：書写書道教育に大切なものとは？」	
助言者	宮下 孝晴（金沢大学人間社会学域人文学類教授） 折川 司（金沢大学人間社会学域学校教育学類教授）
問題提起	飯田 淳一（内灘町立清湖小学校） 八田 和幸（津幡町立津幡南中学校） 水上真由美（石川県立金沢伏見高等学校）
参加学生	金沢大学人間社会学域学校教育学類 （「書写書道基礎」受講生）
進 行	中川 晃成（野々市市立館野小学校）
5. 大会に参加して -----	21
戸崎 浩志（岐阜市立三輪南小学校長）	
6. 石川県書写書道教育連盟のあゆみ -----	23
7. 平成25年度石川県書写書道教育連盟役員一覧 -----	30
8. 石川県書写書道教育連盟規約 -----	31

第 2 4 回 石 川 県 書 写 書 道 教 育 研 究 大 会

平成26年2月14日(金)

第24回

石川県書写書道教育研究大会

金沢市 教育プラザ富樫

大会テーマ

「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育」

主催:石川県書写書道教育連盟

後援:石川県教育委員会

:金沢市教育委員会

:石川県私立幼稚園協会

日程

13:40~13:50
理事会

13:30~
受付

14:00~14:50
全体会
研究協議会 I

15:00~16:45
研究協議会 II

開 会 (1 4 : 0 0 ~)

*あいさつ 石川県書写書道教育連盟会長 宮下 孝晴

研究協議会 I (1 4 : 1 0 ~ 1 4 : 5 0)

研究協議会 I 『書写書道教育における今日的課題～全国の実践を受けて～』

① 第 3 8 回全日本高等学校書道教育研究会 (静岡大会) 報告

発表者 田中 学 (石川県立金沢中央高等学校)

司 会 : 柿木 千鶴 (白山市立松陽小学校)

記 録 : 北野 京子 (津幡町立中条小学校)

研究協議会Ⅱ（15：00～16：45）

「大学生とともに考える：書写書道教育に大切なものとは？」

- 助言者 宮下 孝晴 （金沢大学人間社会学域人文学類教授）
 折川 司 （金沢大学人間社会学域学校教育学類教授）
- 問題提起 飯田 淳一 （内灘町立清湖小学校）
 八田 和幸 （津幡町立津幡南中学校）
 水上真由美 （石川県立金沢伏見高等学校）
- 参加学生 金沢大学人間社会学域学校教育学類
 （「書写書道基礎」受講生）
- 進行： 中川 晃成（野々市市立館野小学校）

閉会（16：50）

*あいさつ 石川県書写書道教育連盟理事長 中川 晃成

（敬称略）



研究協議会 I

大会参加レポート

研究協議会 I のまとめ

大会テーマ：「新時代を切り拓く書道教育 ～繋ぐ静岡の書～」

会期：平成 25 年 11 月 14 日（木）～15 日（金）

11 月 14 日（木） 研究授業・研究協議

- A 義務教育との連携と初期指導のあり方
- B ミニмумスタンダードに基づいた授業実践
- C 鑑賞指導の充実

各高校（A：浜松学芸高等学校、B：浜松市立高等学校、C：静岡県立浜松東高等学校）で、以上の研究授業が行われた。

この中で「ミニмумスタンダード」という言葉に興味があり、研究授業 B を参観した。

現在、静岡県では高等学校芸術科書道 I は「ミニмумスタンダード書道 I」に依って指導されているという。

では、「ミニмумスタンダード書道 I」とは何か。

その作成経緯と目的は以下の通り。



文字通り「ミニмум＝最小限の」「スタンダード＝基準」。つまり『高等学校芸術科書道 I』を指導する上で最小限の基準となるもの』である。

現在、静岡県では高等学校書道教員の採用試験は実施されておらず、専任教諭の数は減少してゆけばかりである。加えて、指導すべき事項は多量であるのに指導時間は週に 2 時間しかなく、指導内容の精選が求められている。この状況下において、静岡県高等学校教育課程研究委員会芸術部会が県内の実情にあった学習指導の指針を作ることになった。

目的は二つ。

一つは、生徒の実態が多様な高等学校の芸術教科において『静岡県の子どもたちに最低限身につけさせたい内容』を、指導要項の『領域』『内容』に基づいて示すためである。あくまでも最低限であり、これが全てではないことも申し添えておきたい。

もうひとつは非常勤講師で芸術教科（音楽・美術・書道）を教えている方々に『何を教えればよいのか』を伝えるためである。科目唯一の存在で、教育課程について伝える機会が少ない非常勤講師の方々にご利用いただければ幸いです。

（『第 35 回全日本高等学校書道教育会兵庫大会集録』より抜粋）

これを指針としてもらうため、各高校に「ミニмумスタンダード芸術 I」（小冊子）が配付されているという。要するに「静岡県内のどこの高校へ入学しても芸術 I は、ほぼ共通した学習内容である」。そう私は理解した。【資料 1】

【資料1】

最低限取り上げたい学習内容

(2) 漢字の書

臨書	楷書 九成宮醴泉銘 建中告身帖（または顔氏家廟碑） 牛橛造像記	楷書の基本点画・欧陽詢の書法・背勢法 顔真卿の書法・向勢法・直筆・藏鋒・円筆 造像記の書法・側筆・露鋒・方筆
創作	行書 蘭亭序 風信帖	行書の特徴と基本点画・王羲之の書法 空海の書法
その他	楷書 二字句（倣書） 行書 4字句（集字創作） 篆刻 雅印の作成	古典を生かした表現の工夫 表現効果の理解 印の基本・篆書の基本・制作手順の理解
	用具・用材の種類と表現効果の違い	表現効果の理解
	取り上げる題材	指導内容

『ミニマムスタンダード書道Ⅰ』より

しかも、「(1) 漢字仮名交じり書」「(2) 漢字の書」「(3) 仮名の書」に加え、初期指導のための「(4) 書道入門」【資料2】を設けて、年間指導の最初に取り扱うようにと明記されている。

【資料2】

(4) 書道入門

A表現

国語科書写と芸術科書道のつながり（短文による漢字と仮名の調和）

用具・用材の基本的知識（文房四宝、用具用材の取り扱い方、手入れの仕方、磨墨の方法）

姿勢と執筆法

硬筆の指導（適切な用具用材の選択、短文や実用書式による漢字と仮名の調和）

B鑑賞

筆意と筆脈・気脈

拓本の知識と見方

※各事項の扱い方（留意事項）

- ① 書道入門は最初に必ず扱うこと。
- ② 「漢字仮名交じりの書」「漢字の書」「仮名の書」の扱いは以下を標準とする。

「書道入門（漢字仮名交じりの書Ⅰ）」→「漢字の書」→「仮名の書」
→「漢字仮名交じりの書Ⅱ」

- ③ 硬筆は必ず取り上げるものとし、篆刻または刻字を積極的に扱うように配慮する。
- ④ 内容の「A表現」及び「B鑑賞」の指導にあたっては相互の関連を図って指導する。
- ⑤ 「B鑑賞」の指導にあたっては、作品について互いに批評し合う活動を取り入れる。
- ⑥ 書に関する知的財産権などについて配慮し、自己や他者の著作物等を尊重する態度の形成を図る。

『ミニマムスタンダード書道Ⅰ』より

つまり、静岡県では、年度当初に「書道入門」を実施し、その後「最低限取り上げたい学習内容」を行なうこと、といった計画マニュアルが作成されているのである。

さて「漢字の書② 行書の学習」の「四字句の集字創作」を参観した。

ここでは、ワークシートを用い「集字・草稿（1～3時間目）」→「気脈の貫通を意識した練習（4～5時間目）」→「全体の構成を工夫した練習・完成（6～7時間目）」、そして「鑑賞会（8時間目）」という単元であった。

今回の授業は、5時間目の「気脈の貫通を意識した表現を工夫することができる」。

段階的に『潤滑、線の肥瘦、気脈の貫通、文字の大小など』を学習できるよう、これまでワークシートを使いながらの授業であった。なかでも今回は「気脈の貫通を意識すること」に重きを置き、紙も半切1/4（縦長）を使用していた。

初めて耳にした「ミニマムスタンダード書道Ⅰ」については、授業後の研究協議で「これまで非常勤講師の場合だと指導内容に偏り等が見られる場合もあったが、それが修正された」という報告があった。

授業そのものについては、「スムーズに展開していた」「話し合いや相互評価、感想などの言語活動の場面がとてもしっかりと充実していた」という声が多かった。しかし、中には「実物投影機の活用がイマイチであった」「実際に気脈の通った作品の提示場面が欲しかった」という厳しい意見もあった。他には、ワークシートで草稿するとき、鉛筆等で線を太く肉付けしている生徒がいたことや四字ではなく二字でもよかったのではないかという意見などの声があった。

教材の精選の重要性を痛感した研究協議であった。また、県下でミニマムスタンダード書道に取り組むことのできる姿勢・体制がうらやましくもあった。

11月15日（金） 分科会・研究協議

- | |
|----------------------------------------------------------------------------------------------|
| I 義務教育との連携と初期指導のあり方 ～書写から書道への円滑な接続を求めて～
『義務教育書写との連携に携わって』
『書道って楽しいな ～導入期の漢字仮名交じりの書の学習』 |
| II 基礎・基本を大切にしたい授業実践
『鑑賞から臨書学習へのつなげる電子型タブレットの活用』
『ミニマムスタンダードに基づいた授業実践』 |
| III 鑑賞指導の充実
『生徒の感性を生かす鑑賞指導
～地域と連携した「不折マップ」の制作で育んだもの～』
『共同作品を通し、互いに学び合う指導の工夫』 |

小学校・中学校との連携について学びたいと思い、Iに参加してきた。

『義務教育書写との連携に携わって』

下石哲幸氏（静岡県立浜松南高等学校）の発表。

静岡県の現状…ここ十年間、静岡県では書道教諭の採用試験が行われておらず（専任は県下97校中27人）、高齢化が進んでいる。この現状をどうしていくか。そして「書写」の現状はどのようになっているのか。

<経緯>

新学習指導要領にも、中学校国語科書写と高等学校芸術科書道の円滑な接続がうたわれている。

そこで、高校の書道教諭として「書写」を担当する方々への手助けはできないかと考えた時、これまで地域との連携を生かし、小中学校への出張授業や書写研修会に参加してきた。また、平成二十一年度から静岡県書写書道教育研究会（静書研）を通じ、小中学校と高校および大学の教員間の交流も始まった。

<実践>

今回、書写との連携事業を始めるに際し、以下の二点を心がけた。

- ・実際に小中学校現場で書写指導を行い、子供たちを通して指導上の課題や問題点を探る。
- ・書写担当の先生方と交流し意見交換することで、書写担当の先生方の書写指導に対する苦手意識を少しでもなくす。

～浜松市立中部中学校へ出張授業～

①実施時期 毎年七月上旬、十月下旬から十一月上旬（各クラス～二時間ずつ授業実施）

②授業内容

- ・各学年とも、県席書コンクールへの出品作品（半紙・行書）の清書完成

③授業展開【資料3参照】

④中学校「書写」担当者による事前指導。

- ・一年生…月二回ほどの授業。毛筆や硬筆の基礎を指導。（年間授業数：約二十時間）

- ・二年生…一学期に二～三時間市の作品展にむけて指導。(年間授業数：約十時間)
- ・三年生…一学期に四時間(年間授業数：約十時間)

※氏名に関しては全員分の手本が配付されている。二学期には行書の基本である運筆の流れや点画のつながりを二時間ほど指導。

【資料3】

	指導目的	学習内容	担当者
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・本日の目標の説明 ・講師紹介 ・筆の特質 ・執筆法の説明 	<ul style="list-style-type: none"> ・コンクール出品作品の清書 ・高校書道担当者A Bの紹介 ・毛筆の弾力を生かす持ち方 ・直筆 	中学教員 高校教員
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・行書の特徴(筆脈) <範書Ⅰ> ・字形や用筆法 <範書Ⅱ> ・個別指導 <机間指導> 	<ul style="list-style-type: none"> ・行書の点画のながれやつながり(筆脈)を知り、範書を見て確認する。 ・字形の取り方や細かな運筆、用筆の説明を聞き、範書を見て確認する。 ・半紙で練習する。 	高校教員A 高校教員B 中学・高校教員
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・誓書提出 ・片付けの指示 	<ul style="list-style-type: none"> ・清書を1枚選び提出する。 ・硯は紙で拭き取り、筆とともに持ち帰る。練習した半紙は捨てずに提出する。 	中学教員

<下石氏の感想>

生徒は「上達した」という実感を持ったようであった。中学校教員は専門家の示範、個別指導を望んでいる。中学校は好意的で協力的であった。今後も連携を継続していく。

<課題>

書写担当者の授業への参加が少なく、連携の難しさを感じた。普通教室の机が小さいため、他教室での実施だったが、水道が無く後片づけができない(設備面での難しさ)。五十分授業では準備と後かたづけの時間が足りない。時間割の工夫が必要である。

氏は、十一月から十二月にかけて書き初め指導も行なっている。また小学校へも出張授業している。こうした実践を通じて連携に協力してくれた浜松市立中学校に感謝している(小規模校だったという側面もあった)。

そして「時間数の問題」「洗い場のない教室環境」「指導者研修の内容」「指導者の意識」といった問題点が見えてきた、これからも書写・書道の楽しさを伝えるためにも連携を続けていきたい、と発表を終えた。

十年前、地元中学校から書写指導が低調であるという理由から書写指導の手伝いを依頼された書写（義務教育）と書道（高校）の連携に携わってきた田辺隆宏氏（静岡県立湖西高等学校）の発表。

氏は「指導者にとって“書写”が楽しいものであり、興味関心を深めるものでない限り、生徒に“書写”の面白さは伝わらない」「指導書に依る技術指導から書写を好きにさせる指導へ」と発想を転換し、書写から書道へと繋げていくと考える。そのためには書写担当者の指導力・表現力のレベルアップが重要である、とも述べていた。

書写指導が苦痛と感ずる場合、筆を持つことにとらわれず、どんな用具でも「表現することの面白さ」「自分の言葉で人に伝える作品制作する楽しさ」を書写担当者に伝えることが大切であり、筆については高校からでも位置づけてよいのではないかと、とも。

現在、近隣の小中学校から出張授業を依頼されるようになり、互いに連絡を取りあい、書写指導の相談をできるようになった。

関係を築けていない地域では書き初めコンクールの審査への協力から始め、それを機に夏季研修会、出張講義の実施と交流をしていけるのではないかと、そう締めくくりました。

『書道って楽しいな ～導入期の漢字仮名交じりの書の学習』

発表者（毛利慶子氏・岐阜県立岐阜高等学校）の発表。氏の思い（ねらい・意図）として“生徒に「書道って楽しいな」と思わせたい。筆は自己表現できる素晴らしい用具であることを実感させたい。「お習字」のイメージで選択してくる生徒に手本を書き写すだけの授業ではないということを理解させたい”が伝わってきた。

内容は、導入期の授業展開の発表であった。

導入期の授業展開はこの通り。

- | | |
|-------|-------------------------------|
| 第1時 | 書道オリエンテーション |
| 第2時 | 文房四宝について（ビデオ鑑賞） |
| 第3時 | 大字書制作、リレー書道（グループ活動） |
| 第4時 | 磨墨・用具の手入れ方法 |
| 第5・6時 | 基本点画の練習 |
| 第7時 | 筆の特質を知ろう |
| 第8時 | 漢字仮名交じりの書の学習（いろいろな線による表現の広がり） |

以下に第1時のみ、おおよその展開を記す（※この高校は65分授業を実施）

<第1時 書道オリエンテーション>

- ①自己紹介。書道アンケート（出身中学・中学時の部活動・書道選択の理由・文字を書くことが好きか嫌い・書写学習状況・小中学校での書写の思い出・エッセイ等を読んで

の感想→文章力・書道授業への要望・自己PR)

- ②マネキンの首を取りだす。これを持ち、
「今からある動作をします。いったい何の字なのか、考えて」
～隣の書道制作室へ移動する。部屋にはあらかじめ全紙を4枚縦長につないだ画仙紙を準備してある～
- ③移動後、生徒に答えてもらう。
ヒントとして「マネキンは生首。“首”の付く字は？」→正解は“道”
「道」の字の由来を説明する(←文字への興味をうながす)。
- ④大きいだるま筆2本持ちで生徒のリクエストに応じて即興で書く。
- ⑤書道室に戻り、今一度、「自己表現としての書道」について(そこには人間性が表れてくること)等の思いを話す。
- ⑥「書道の授業を受けるにあたって」(プリントで説明)

書道制作室があるといった設備に違いがあるとはいえ、驚きと発見の展開でした。氏は導入期について「線の書きぶりで伝わるイメージや伝えたいことが変わってくる面白さを発見させたい。自分の思いを素直に表現できる書道の面白さを感じさせたい。作品を見た時、イメージするものは何か、作者はどんなことを考えているだろうかと掘り下げていくと様々な答えが返ってくる。それらに正解はないのだから、自分の感じたことを大切にしていって、その思いはどこから来るのだろうかということを考えさせる。そして自分の書きぶりを考えて書く。それだけでも表現豊かな味わいのある作品を書くことができる。この時期、細かいことは言わない」という考えのもと、「しかし、まだまだ思うようにいってはいないと感じているはず。ここから確かな技法を学んでいく」としている。

やはり印象的だったのが「次は何をするのだろうか？」と生徒をワクワクさせられるような授業、生徒の力を引き出せるような授業をしていきたい」という言葉であった。

～大会に参加して～

各地域で小・中学校の連携が行なわれていても、その連携を高校まで繋ぐことができるのか、という不安な気持ちがある。というのも、石川県(金沢市)の場合、高校においては“地域”意識が少ないことや専任教諭数の大きな差など、この静岡県の実践例をそのまま取り入れることができるのか。うらやましい面があった。

また、記号としての記録のための書字(書写)から芸術書道への展開・飛躍についてはまだまだいろんなアプローチがあることを思い知らされました。

研究協議会 I

書写書道教育における今日的課題～全国の実践を受けて～

第38回全日本高等学校書道教育研究会（静岡大会）報告

発表者 田中 学 （石川県立金沢中央高等学校）
司 会 柿木 千鶴 （白山市立松陽小学校）
記 録 北野 京子 （津幡町立中条小学校）

～報告を受けての質疑応答・意見・感想～

◇ミニマムスタンダードについて（高校より）

- ・泉ヶ丘高校では、九成宮禮泉銘の指導で当時の政治と結び付け、知識を教えた後、作品に生かせるようにしている。静岡では、歴史的背景について、指導しているのか。
→仮名についてはあるが、楷書ではないようだ。
- ・飯田高校では、年表を取り入れ、興味を持たせるようにしている。
- ・ミニマムというが、何が最小限なのか。個々の教員が伝えたいものは、それぞれ少しずつ違う。教員が伝えたいものを話し合う機会があって作られたものだという点でよいと思う。

◇義務教育との連携につて（中学校より）

- ・中学校の新しい教科書には、篆書など少し載っている。美術で篆刻の授業もある。鑑賞の授業などで、高校の先生に来てもらえば、連携も可能。
- ・金沢市では、書写の授業時数は確保されているはずだが、書写が苦手な先生の指導内容はどのようになっているかわからない。高校書道につなげるために、どこまで指導しなければいけないのか考えなければならない。

◇岐阜女子大の取り組みについて

- ・地域の教育力を生かして子どもを育てていくために、今年度より、大学生が、ボランティアとして小学校へ行っている。小学生の前で実際に書いてみせると、子どもたちはとても喜んでいた。
- ・新指導要領には、正しい文字を書くこととあるので、正しい文字を書くことができる教員が必要。書道をやる学生が小学校教員になるとよいのではないか。岐阜女子大では、副専門に高校国語や書道を選択することをすすめている。埼玉県で、書道教員が二人採用された。そのうち一人は、岐阜女子大だった。

研究協議会Ⅱ

パネルディスカッション

研究協議会Ⅱのまとめ

研究協議会Ⅱ

助言者	宮下 孝晴	(金沢大学人間社会学域人文学類教授)
	折川 司	(金沢大学人間社会学域学校教育学類教授)
問題提起	水上真由美	(石川県立金沢伏見高等学校教諭)
	八田 和幸	(津幡町立津幡南中学校教諭)
	飯田 淳一	(内灘町立清湖小学校教諭)

参加学生

金沢大学人間社会学域学校教育学類

	山田 葵	
	本江 優実	
	山口 友莉	
	細川 美和	(現職教員内地留学院生)
	中口健太郎	(現職教員内地留学院生)
進行	中川 晃成	(野々市市立館野小学校教諭)
記録	柿木 千鶴	(白山市立松陽小学校教諭)
	黒川なつき	(金沢市立木曳野小学校教諭)

昨年の議論 (収録12ページ～19ページ プリントの裏の課題) を踏まえて議論ができるとうい。

山田

大学の書写書道の授業を受けて、小中で受けたものと全くイメージが違った。これまでお手本を忠実に写すものと思っていたが、自分を表現する一つの方法として書写書道があると思った。楽しかった。

本江

小学校から高校まで書写書道の授業を受けていていつも思ったのは、書くことがプレッシャーということだ。基礎基本も大事だが、手本通りに書いて、間違っていたら先生に赤でなぞられると、否定される感じがした。高校で芸術分野もあったが、お手本通りではなく、「感性を出して。」と言われて戸惑った。鑑賞をして自分の字をどう書くのが正解なのか。今回大学で、基礎基本が大事だけれど、思った字を書いてみて、その書いた文字から上達し、いいものに近づけていくのが大切なのだということが分かった。

山口

小3のときから(書写が)嫌い。それは、お手本どおりに書くのができないから。どうやったらお手本通りに書けるのかが分からない。書いて見せてくれてもよく分からず、言葉で説明してほしい。自分の字を人に見られるのも、教室の後ろに掲示されるのも、先生に見られるのも嫌だった。大学の書写書道の授業では、楽しかった。どうしてかという、自分の字はきれいではないが、お手本通りじゃなくて自分の字で書けばよいということや、認めてくれるという安心感があったからだ。

細川

小学校のとき、書写は大好きで楽しかった。中学での書写の授業は書き初めくらいしかなく、寂しか

った。高校では音楽を選択していた。大学の授業で何年ぶりに書写書道に触れ、その中で高校の芸術としての書道を知り、楽しそうだった。小学校の書写は芸術としての側面がないのが不思議。音楽や図工では鑑賞しているのに、書写はない。子どもたちと話す機会もない。寂しい感じがする。現場に戻ったら、芸術として文字を見るとか、ただお手本通りに書くのではなくて、手本のどこがいいのか、自分の字のどこを直せばいいのかを考えさせる授業をしてみたい。ただ、高学年では書写を担当が持てないことが多いのだが。

中口

大学で教員となっていく学生にどういう教育をしているのかという観点で興味があった。授業で、自分が小学校で受けてきた書写とは変わってきているという印象を受けた。小学校ではお手本を写すだけだった。学生さんの中で「楽しさ」が出てきたのはよかった。中川先生の授業では、その人のいいところをほめる場面がよく見られた。ひたすら褒める、よさを認める。書道のいろんな例を見せていただいた。こんな字でもいいのだとか、その人らしさを認めていく場があるというのが書写を好きになる基本だと思う。自分は小学校で受けたまま手本を写すというスタイルで授業をしている。学生さんが書写が嫌だったという理由は、他の芸術科目とは違うところである。音楽はリズムや音遊び、図工は造形遊びから入る。しかし、書写は型から入る。型の指導が苦手意識を作っているのではないか。型の習得は大事だが、楽しむ要素、自分らしさを感じられる場を作るのが大切だ。書写に親しむ子どもが増えて欲しい。

中川

感想を受けて、実際に授業をしている水上さん、八田さん、飯田さんに話を聞いて、それを受け折川先生と宮下先生にお話をさせていただく。

飯田

自分は字を書くのがコンプレックスでITCに走った。お手本通りに書けないからという感想があったが、自分も同じだ。分かりやすくするにはどうすればいいか考えて、デジタルコンテンツを作った。「分かりやすい」というのがキーワードである。穂先を拡大したものを見せるだけでも授業が変わった。コンテンツを作りながら、具体的な指導を考え実践している。コンテンツもただ見せればいいのかではなく、気づかせ、考えさせ、課題意識をもってコンテンツを見せる。見せ所、止め所、考え所が教師の力量だと思う。日々考えながらやっている。今は教科書会社からコンテンツも出ていて、そこからも学んでいる。また子どもの手を持って書くと、子どもたちに歓声上がる。その反応が嬉しくて自分で練習したりもしている。少し書写の時間も楽しみな子どもが増えるといいと思う。

八田

中学校は1年で書写的な要素、3年生で芸術的な要素が出てきて行書を教える。行書になると、気持ちの表出が出てくるから、3年生になってから書字が面白くなったという生徒が出てくる。実態からいうと、自分は書写指導が得意なのできっちり取り組んでいるが、そうでない方は硬筆書写の授業が多い。書き初めの審査は教科書のお手本と似ているものに、賞を与える。受け持っている女子ソフト部に太くとか中心をそろえる等々特別指導をした。しかし、審査は「手本といかに似てるか」なので、太すぎる

という評価だった。一部には、お手本に似ていないけれど「この字いいよね」という先生もいた。指導者側の見る目を育てるためにも、どういふ文字を評価していくかという話し合いをする場が必要だ。

水上

県立高校で書道の教員は二人のみで、私自身、現在国語との兼務で書道を教えている。自分自身は高校生のときは書道を選択せず、大学に入って小さいころ書いていた筆の感覚が好きで書道部に入り再び筆を持った。臨書しているとき、わくわくして楽しかった。今までにない感動を経験した。きれいに整えて書くとか、文字から気持ちが伝わるというコミュニケーションツールとしての面はあくまで1つで、書には他にも広い世界があるというを紹介したいと思い今大学で講義をしている。1回目はひとつの文字にある世界を、構成、線の魅力を分析し感じてもらおうとした。楷書の九成宮醴泉銘や行書の蘭亭序などを扱った。2回目は、実際に書くことで体験してもらった。かな文字で日本人の世界観を感じてほしいと思い、升色紙を扱った。実際に生徒に感じてもらえるように工夫して作った教材を用いながら話をした。3回目は、表現することの楽しさに焦点を当てた。大字書をやることで、自分を思いっきり表現することの楽しさを実感してほしいと思った。学生さんが将来国語の先生として書写を教える時に、文字のあらゆる魅力を知っておいてほしいという思いで講義をした。問題提起として、高校では学習指導要領では必修単位が2単位となり、受験科目以外は軽視されている現状がある。1年生2単位のみ履修で、本当にいいのかと疑問に思い、本校では3年生にも選択科目として芸術を残してもらったが、開講はなかなか難しい現状がある。非常勤講師が多いため、授業の確保も難しい。心を育てる役割を持つ芸術科目は、残していかなければならない。

折川

これまでの話を聞いて自分が感じたことをお話しする。まずは手本の話。学生、先生方、私の中にも、「いかに楽しく手本に近づくか」というテーマが共通にあるのだということ。これは学生らの話を聞いていても強く感じた。そしてそのベースとして「なぜ手本に近づかなくてはいけないのか」という視点が重視されていることも共通している。しかし、後者については意識が若干薄いかもしれない。この二つは両方とも大切なこと。二つ目は、そうしたことを学生たちにどう伝えていくのかということ。書写書道基礎受講者は20名足らず。教員養成課程に所属する学生全体の5分の1か6分の1しか受講していない。受けていない学生には伝わらない。小学校の先生や中学校の国語教師になる人、高校の芸術科の教師になる人に、書写書道教育のめざすところはなになのかを伝えないまま卒業させてしまう、大学カリキュラムの問題がある。三つ目は書写書道を苦手としている人からみた書写書道教育という視点が大切だということ。単に熟達者の目線で語って自己満足するということではだめで、苦手としている教師の目線で寄り添っていくことも大切。

宮下

よくわかった。問題は、字を書くことに対するコンプレックス。自分の字が嫌いということだ。その原因は日本の社会的・歴史的背景にあり、字が汚いと教養がないと思われてしまう価値観。私は長くイタリアに留学していたが、すごく印象的なことがある。それは、イタリアの学生はやたらにノートをとること。文字は筆記体ではなくて独自のスタイルだが、書くスピードはめちゃくちゃ速い。また、イタリア人には文字に対するコンプレックスがない。自分は書をやってきて良かったと思うが、実は嫌だっ

たこともある。ワープロがない時代だったから、友人たちが手紙をくれなかったことだ。たしかに私も氷田先生には、なかなかお手紙を書けない。

ところで、デパートで買い物をしてのし紙を頼んだところ、文字がパソコン印刷では時間がかかるので、筆耕が書いた文字でもいいでしょうかと店員に問われたことがある。印刷したものより、人が筆で書いたものの方がいいに決まっていると思うのだが…。どうも日本の手書き文字文化には変なコンプレックスが生じてしまっているようだ。どうすればよいのか考えるのが、この教育研究集会であるわけだが、まずはこの場から書家や書道家が出て行った方がよさそうだ。専門的に書をやってこなかった人こそが、これからの書写書道を真剣に考えるべきなのだから。

小学校中学校から、図工や美術がなくなったからといって、日本人の美的センスが悪くなるだろうか。美術大学に進学したいという若者だっていなくなりはいらない。書写書道教育についても、そうしたラディカルな視点に立って考えてみる必要がある。

私が参観した大学の書写書道教育の授業が終わると、学生たちから自然に拍手が起こる。中川先生、岩田先生、水上先生が字を書くことの楽しさを教え、コンプレックスを取り除いてあげたからだと思える。これからの大学での書写書道教育のあり方は、文字を書くことに関する古くさいモラル、墨の擦り方や筆の持ち方などではなく、字が下手でも教養がないわけではないのだから、新しい土俵で考えることが大切だ。

ほとんどの学生たちは正しい鉛筆の持ち方などできないが、必要ときには鉛筆を走らせて90分の論述試験をこなす。そういう時代だ。レポートはキーボードで打って、データで提出することを大学は推奨している。昨今は、授業のノートをパソコンで取る学生の姿もチラホラ。とにかく、手書きで文字を書くことが少なくなってきた。そういう時代を見据えて書写書道教育を考えていくべきだ。

静岡大会に参加した田中先生の報告も参考になった。物理的に少ない時間の中で何を教えられるのか。最低限しか教えられない現実から生まれた「ミニマムスタンダード」。どうしようもない現状の中で作られた方策だ。間違っていないと思う。しかし、ミニマムではなく、もっと正確には「エッセンシャル」スタンダードではないか。伝えようとするものの本質を、できるだけ端的に合理的に伝えていく。書道教育の本質とは、書を学ぶ者が必ず通ってきた臨書など古典から学ぶことだと、私は考えている。長い歴史を生きてきた昔の人の表現や精神に触れるのは楽しい。書写でも臨書ができるといい。

中川

グローバルに物事が動いて、30年前とは時代が違う。時代の流れがある。学生さんに、先生になったときに今の流れから、こういうところを考えたいなと言うところや感想をお願いします。

山田

大学になってから書を始めて、書道部にいる。きっかけは、友達が高校の書道部で、それを見てすごいと思ったから。小中学校の時、作品を見る機会がなかった。小中学校の段階で古典に触れるのが大切だと思う。高校になって、いきなり感性を求められても良さはわからない。教科書にいろんな作品が載るといいと思う。鑑賞の機会を設けたい。自分はお手本を真似ればいいと思い、苦手意識がなかったので、児童に苦手意識をなくして指導ができるか自信がない。苦手意識をもって先生になる子は武器になるのではないか。

本江

小学校のときから先生になるのが目標だった。印象的だったことがある。クラスにとっても書写の上手な子がいた。ある先生が、その子の手を後ろから持って書いたときに、「私より下手じゃない」と言われたのを聞いた。自分も先生になってから言われるのだろうか？中学・高校で、徐々に基礎・基本ができていくと思っていたが、技能が高まらず不安だった。大学の授業で具体的に分かって良かったが、今の私には教える技量がない。大学の授業は終わったので、教えるときにどうしようという気持ちがある。書道教室に通うか。不安でもやもやしている。

山口

子どもたちには書写の授業を楽しんでもらいたい。自分の字を嫌いになって欲しくない。自分が嫌いになったのは、周囲と比べて自分がうまく書けなかったから。子どもと一緒に字の上達をしていきたい。絵が下手でも絵は教えられるが、絵を教える技術や知識がないと教える資格がない。書写も同じ。評価するときに、お手本に似た字を評価するか、自分の字を書く子を評価するのか。お手本のポイントを押さえた字を評価したい。

細川

小学校書写に欠けているものの1つは、書を楽しむこと。もう1つは考えることだ。基本をしっかり身に着けるのが大切だとわかっている。基礎基本を身につけるには、どうすれば良くなるのか、考えさせる授業をしたい。書写を楽しむということも取り入れながら。また、書の鑑賞や浮世絵の模写のように芸術書の真似もしてみたい。素敵な書を見て、好きなように書かせる活動を取り入れてみたい。

中口

学生の方は、教員になった時基礎基本がないから不安だと言っていたが、若手教員にもたくさんいる。周りの同僚に聞きながらもできる。自分も教科書を見ながら教えることができている。教員になってからも努力していける。いかに楽しく手本に近づけるかは、教員の技量に尽きる。子どもたちは、書がかっこいいと思う感覚はある。書家がテレビに出演していると反応がいい。水墨画や鳥獣戯画の作品などを通して、筆で書く楽しさを意図的に取り入れていきたい。筆のフォント テレビ、和食系の看板やメニューから、和の心を感じさせ、それを再現するような授業をやってみたい。

中川

教員を指導される立場だけではなく、現場の様子もお話していただいても結構です。諸江先生お願いします。

諸江指導主事

いろんな立場からの意見を聞いて良かった。校内研サポートで1件書写の授業を行った。案外現場で書写をもっている人が教科書を見ていないと感じる。楽しくイメージしながら学習できるように、指導過程の例も紹介している。子どもたちが苦手意識を持たないために、褒めて育てることを伝えていきたい。

中川

岐阜から来ていただいた先生方、お願いいたします。

戸崎

大学生の三人がいいことを言ってくれた。退職までに大学生と関わりを持ちながら、書写の指導にあたりたい。書写の専門家でない方の専門性をどう高めていくか、全国的な問題だ。昨年引き続き思った。宮下先生の思い切った発言をはじめ、いろんな視点での意見を聞くことができ、3回目の参加だが、毎回勉強になっている。

岐阜女子大学の方

石川県で始めた書写教育を岐阜で完成させます。(笑)

どこの県も書道の教諭が減っている。漢字文化圏で国民全員が漢字とかなを書けるのは日本だけだ。漢字を書けるはずの中国や韓国の人も国民全員は書けない。絶えず書道を残そう、裾野を広げようという思いを強くした。

中川

熱い会になった。これを子どもたちにどう返すかが自分たちの課題だ。ありがとうございました。

大会に参加して

第24回石川県書写書道教育研究大会に参加して

岐阜市立三輪南小学校長

戸崎 浩志

本年度は、本校の校区にある岐阜女子大学の杉山博文理事長、久保田智子先生とともに参加させていただきました。児童や大学生及び教員を育てていくために、大学と小学校とが連携を図っていくことに共通理解ができ、歩み始めたからです。

研究協議会Ⅰでは、田中学先生の全日本高等学校書道研究大会静岡大会の報告があり、「ミニマムスタンダード」と「義務教育との連携」等について、詳しく説明され大変興味深く聴かせていただきました。「指導書による技術指導」から「書写を好きにさせる指導」へと発想を転換し、書写から書道へ繋げていくという考えに共感しました。

研究協議会Ⅰでは、「大学生とともに考える：書写書道教育に大切なものとは？」というテーマでパネラーのみなさんが貴重な意見を述べられました。特に、金沢大学2年生3人の書写書道授業を受けてきた体験談、率直な意見や思い、そして今後「こんな授業をしたい」という話は、勉強になりました。というより、現職の教師として反省させられました。

- ・自分は、書写の授業が嫌いだったから、楽しい書写の授業がしたい。どうしたらよいか？
- ・きれいな字は書けないが、子どもと一緒に練習して、自分も成長し指導していきたい。
- ・子どもの書いた字を否定しないように、かつ基礎・基本を大切にしたい評価の在り方は？
- ・古典の鑑賞を授業に取り入れ、書写書道の素晴らしさに気付かせ、憧れをもたせたい。

等々、「書写書道教育に大切なもの」の核心に迫る発言・提案だったと思います。

助言者の折川司先生より、「手本にいかにも楽しく近づか、なぜ手本に近づかなければならないか、両面からの指導が大切である」と教えていただきました。また、大学側の課題として、全ての学生に書写書道教育の基礎講座を受講させることや書写を苦手としている教師への支援（対応）をあげられ、岐阜県の課題と全く同じであることを痛感しました。

会長の宮下孝晴先生は、パソコンが普及して文字を書かなくなった時代になり、「新しい土俵で書写書道教育を考えていく時が来たと思う」という大胆な発言がありました。そして、深く感銘を受けたことは、「ミニマムスタンダードをエッセンシャルスタンダードにし、古典に触れ、臨書を大切にしながら、児童生徒・学生に楽しいと思える授業を展開してほしい」と熱く書写書道教育の本質を語られたことです。

今回明らかになった書写書道教育の課題（楽しい書写書道授業の在り方、高校・大学との連携、教職を目指す大学生の基礎講座の充実、現職教員の指導力向上の研修等）について、岐阜に持ち帰り、関係者と連携しながら解決に向けて取り組んでいきたいと思っています。

研究協議会で司会をされた柿木千鶴先生と中川晃成先生に、われわれ参加者にも配慮して発言の機会を与えていただき、ありがたく思います。また、助言者や提案者の先生方はじめ、本研究大会の関係者の皆様、誠にありがとうございました。

連 盟 の あ ゆ み

連 盟 役 員 一 覧

連 盟 規 約

石川県書写書道教育連盟のあゆみ

1987. 1. 23 (昭和62年) 有志が集い県下に校種一貫した書写書道教育研究組織設立に向けて懇談する会を発足させる。(1988. 2. 26迄に9回の会合を開く)
1988. 4. 22 (昭和63年) 石川県書写書道教育懇談会と改称し第1回の会合を持つ。[金沢大学教育学部書道演習室](1995. 10. 5迄に48回開催する。)
1989. 8. 29 (平成元年) **石川県書写書道教育連盟設立総会** [ホテル六華苑]
 <平成2年度に第1回石川県書写書道教育研究大会開催することを決定>

平成元年度 石川県書写書道教育連盟役員 (敬称略)

名誉顧問	金子曾政<元金沢大学学長>	
顧問	南 和男<石川県教育長>	
相談役	北西正二 坂口 敏 田島庄吉 久田久信 氷田茂良 横西 清	
会長	藤 則雄<金沢大学教育学部長>	
副会長	[石川県教育委員会学校指導課長] 三宅正敏 [金沢市小学校教育研究会書写部長] 河本隆成<金沢市立馬場小教頭> [金沢市中学校教育研究会習字部長] 大野重幸<金沢市立金石中校長> [石川県高等学校教育研究会書道部会長] 佐藤政俊<金沢女子高校長> [石川書写の会会長] 山田泰正<鹿島町立越路小校長> [金沢大学(教育学部)書写書道教育担当者] 法水光雄<金沢大学助教授>	
理事長	[金沢大学(教育学部)書写書道教育担当者]	兼 任
副理事長	: 幼・保部: 嘉門久直<森本幼稚園長> : 小学校部: 森川登夫<津幡町立中条小校長> 谷村修次<小松市立蓮代寺小校長> : 中学校部: 松寺淳照<金沢市立森本中教頭> : 高校部: 中山武久<津幡高校教頭>	
監事	吉田一郎<小松市立向本折小校長> 木本峰生<七尾市教育委員会学校教育課長>	
理事	: 県教委学校指導課: [小学校・中学校(国語科書写)担当指導主事] 永井志津子 [高等学校(芸術科書道)担当指導主事] 高沢幹夫	

*金沢地区

- : 幼・保部: 青山洋子<みどり・かわい幼稚園副園長>
- : 小学校部: 林 道子<南小立野小教諭> 中川晃成<館野小教諭>
- : 中学校部: 干場和子<野田中教諭> 古本佳世<野田中教諭>
- : 高校部: 林 昭悦<金沢女子高教諭> 石浦義彦<金沢泉丘高教諭>
- : 障害児学校部: 南 進 <県立養護学校教頭>

*加賀地区

- : 小学校部: 穴田孝子<三谷小校長> 川筋登史己<向本折小教頭> 市村良二<木場小教諭>
- : 中学校部: 阿戸壮一郎<丸ノ内中教頭>
- : 高校部: 東野洋子<小松市立女子高教諭> 北室正枝<金沢西高講師>
- : 障害児学校部: 川上千鶴子<小松養護学校高等部主事>

*能登地区

- : 小学校部: 西野和代<天神山小学校長> 福田教導<金ヶ崎小学校教頭>
- : 高校部: 嶺喜代子<飯田高校教諭> 大場豊治<七尾高校教諭>

事務局

:事務局長: 永江芳教<金沢商高教諭>
:副事務局長: 久田英夫<金沢中央高校教諭> 中川晃成<館野小教諭>
:庶務部: 部長・中田稚子<森本中教諭> 副部長・宮嶋雅美<明和養護学校教諭>
:会計部: 部長・佃さえ子<千代野小教諭> 副部長・八田和幸<鳴和中教諭>
:研究部: 部長・金田京子<宇ノ気小教諭> 副部長・嵐 雪絵<金大付属中講師>
:会報部: 部長・板橋法子<河南小教諭> 副部長・西尾恵美子<中島小教諭>大坂育代<湯野小教諭>
:研修部: 部長・八田和幸<鳴和中教諭> 副部長・北村千恵<山中小教諭>
:調査部: 部長・大浦 努<大浦小教諭> 副部長・宮崎聡美<松波小教諭>西川真理<野々市小教諭>

1989. 11. 15 第4回全国大学書写書道教育学会・平成元年度全国大学書道学会
~17 ・平成元年度日本教育大学協会全国書道教育部門会《後援》
12. 1 第1回理事会 [金沢商業高等学校]
12. 10 『石川県書写書道教育』(創刊号) 発行

(平成 2年度)

1990. 5. 18 第2回理事会 [金沢商業高等学校]
10. 1 『石川県書写書道教育』(第2号) 発行

11.19

第1回石川県書写書道教育研究大会
[金沢市立南小立野小学校・金沢市立野田中学校・石川県立金沢泉丘高等学校]

公開授業 小学校2年・中学校1年・高等学校1年

講演 久米 公先生 (文部省視学官・千葉大学教授)
演題:「新学習指導要領のめざす書写書道の学習指導」

11. 19 第3回理事会
1991. 2. 23 第4回理事会
3. 1 『石川県書写書道教育』(第3号) 発行

(平成 3年度)

6. 4 第5回理事会 [金沢商業高等学校]
10. 30 『石川県書写書道教育』(第4号) 発行

11.18

第2回石川県書写書道教育研究大会
[野々市町文化会館・野々市町立野々市小学校・石川県立養護学校]

公開授業 小学校1年・6年 学校公開 養護学校クラブ活動等

講演 續木湖山先生(帝京大学教授)
演題:「児童生徒の心を引きつける具体的な指導方法」

11. 18 第6回理事会 [野々市町文化会館]
1992. 3. 26 第7回理事会 [金沢ガーデンホテル]
3. 30 『石川県書写書道教育』(第5号) 発行

(平成 4年度)

5. 28 第8回理事会 [金沢中央高等学校]
10. 20 『石川県書写書道教育』(第6号) 発行

11.18

第3回石川県書写書道教育研究大会 [金沢市立鳴和中学校]

公開授業 中学校1年

講演 久米 公先生 (千葉大学教授) 演題:「学習指導の最適化のために」

11. 18 第9回理事会 [金沢市立鳴和中学校]
1993. 3. 30 『石川県書写書道教育』(第7号) 発行

(平成 5年度)

6. 4 第10回理事会 [金沢中央高等学校]

11.11

第4回石川県書写書道教育研究大会
[石川県立金沢商業高等学校・金沢市立富樫小学校・石川県立金沢泉丘高等学校]

公開授業 小学校3年 高等学校1年(2)

講演 田中東竹先生(実践女子大学教授)
演題:「江戸時代の書教育—川柳に見る手習い—」

11. 11 第11回理事会
3. 31 『石川県書写書道教育』(第8号) 発行

(平成 6年度)

6. 4 第12回理事会 [金沢中央高等学校]

10.19

第5回石川県書写書道教育研究大会[小松市立女子高等学校・小松市立安宅小学校]

公開授業 小学校6年 高等学校1年

講演 柳下昭夫先生(東京家政大学講師・前教育課程審議会委員)
演題:「文字感覚を養い、自ら学ぶ意欲を高める書写書道教育のあり方」

10. 19 第13回理事会
12. 1 『石川県書写書道教育』(第9号) 発行
1995. 3. 30 『石川県書写書道教育』(第10号) 発行

(平成 7年度)

6. 6 第14回理事会 [金沢商業高等学校]
9. 20 『石川県書写書道教育』(第11号) 発行

10.20

第6回石川県書写書道教育研究大会[鹿島町立越路小学校・ラピア鹿島]

公開授業 小学校3年 研究発表 養護学校

講演 浦野俊則先生(二松学舎大学教授) 演題:「漢字は生きている」

10. 20 第15回理事会 [鹿島町立越路小学校・ラピア鹿島]
1996. 3. 『石川県書写書道教育』(第12号) 発行

(平成 8年度)

4. 25 第16回理事会 [金沢商業高等学校]
6. 6 第17回理事会 [金沢商業高等学校]
10. 『石川県書写書道教育』(第13号) 発行

11.21

第7回石川県書写書道教育研究大会[金沢市立弥生小学校・石川県立金沢中央高等学校]

公開授業 小学校4年 高等学校2年次 研究発表 中学校

講演 平形精一先生(静岡大学教授) 演題:「意欲を高めるための書写書道教育」

11. 21 第18回理事会 [石川県立金沢中央高等学校]

1997. 3. 『石川県書写書道教育』（第14号）発行

(平成 9年度)

6. 25 第19回理事会 [六華苑]

10. 『石川県書写書道教育』（第15号）発行

11.21

第8回石川県書写書道教育研究大会[加賀市立南郷小学校・加賀市文化会館]

公開授業 小学校4年 高等学校2年次 研究発表 中学校

講演 宮澤正明先生(山梨大学助教授)

演題:「実験を通して考える書写・書道」—「手本が無くてかかえる」をめざして—

11. 21 第20回理事会 [加賀市文化会館]

1998. 3. 『石川県書写書道教育』（第16号）発行

(平成10年度)

7. 18 第21回理事会 [六華苑]

10. 『石川県書写書道教育』（第17号）発行

11. 2

第9回石川県書写書道教育研究大会[内灘町立大根布小学校・内灘文化会館]

公開授業 小学校3年 研究発表 中学校・大学

講演 平形精一先生(静岡大学教授)

演題:「これからの書写・書道教育の方向と課題」

11. 2 第22回理事会 [内灘文化会館]

1999. 3. 『石川県書写書道教育』（第18号）発行

(平成11年度)

6. 16 第23回理事会 [六華苑]

9. 『石川県書写書道教育』（第19号）発行

10.19

第10回石川県書写書道教育研究大会

[七尾市立天神山小学校・七尾市立幼稚園・七尾サンライフプラザ]

公開授業 小学校5年 公開学習 幼稚園 研究協議会

講演 久米 公先生(大東文化大学教授)

演題:「書写・書道教育における今日の課題」

10. 19 第24回理事会 [七尾サンライフプラザ]

2000. 3. 『石川県書写書道教育』（第20号）発行

(平成12年度)

6. 9 第25回理事会 [六華苑]

10. 『石川県書写書道教育』（第21号）発行

12. 7

第11回石川県書写書道教育研究大会[金沢勤労者プラザ]

パネルディスカッション 研究発表

12. 7 第26回理事会 [金沢勤労者プラザ]

2001. 3. 『石川県書写書道教育』（第22号）発行

(平成13年度)

6. 9 第27回理事会 [六華苑]
10. 『石川県書写書道教育』(第23号) 発行

12. 6

第12回石川県書写書道教育研究大会[根上町総合文化会館]

研究協議

講演 町川 哲先生(香川県土庄小学校教諭)
演題:「書写指導における具体的実践にむけて」～香川県の実践をもとに～

12. 6 第28回理事会 [根上町総合文化会館]
2002. 3. 『石川県書写書道教育』(第24号) 発行

(平成14年度)

8. 8 第29回理事会 [六華苑]
10. 23 『石川県書写書道教育』(第25号) 発行

12. 5

第13回石川県書写書道教育研究大会[野々市町文化会館・野々市町立菅原小学校]

公開授業 小学校5年 研究協議

12. 5 第30回理事会 [野々市町文化会館・野々市町立菅原小学校]

(平成15年度)

2003. 8. 27 第31回理事会 [六華苑]

12. 4

第14回石川県書写書道教育研究大会[金沢市西町研修館・金沢大学サテライトプラザ]

研究協議

12. 4 第32回理事会 [金沢大学サテライトプラザ]

(平成16年度)

2004. 8. 10 第33回理事会 [六華苑]
12. 『石川県書写書道教育』(第26号) 発行

12. 10

第15回石川県書写書道教育研究大会[松任市市民交流センター・松任市立蕪城小学校]

公開授業 小学校3年・6年 研究協議

12. 10 第34回理事会 [松任市市民交流センター]

(平成17年度)

2005. 10. 3 第35回理事会 [六華苑]

12. 9

第16回石川県書写書道教育研究大会[金沢市教育プラザ富樫]

研究協議

12. 9 第36回理事会 [金沢市教育プラザ富樫]

(平成18年度)

2006. 9. 25 『書写コンテンツ』開発 (平成18～19年度)
第37回理事会 [金沢大学サテライトプラザ]

11.27	第17回石川県書写書道教育研究大会[石川県立小松明峰高等学校・小松市立串小学校] 公開授業 小学校3年・高等学校1年 研究協議
11.27	第38回理事会 [石川県立小松明峰高等学校]
(平成19年度) 2007.10.18	第39回理事会 [兼六荘]
12.4	第18回石川県書写書道教育研究大会[金沢市立三谷小学校] 公開授業 小学校5年 研究協議
12.4	第40回理事会 [金沢市立三谷小学校]
(平成20年度) 2008.10.31	第41回理事会 [兼六荘]
12.12	第19回石川県書写書道教育研究大会[金沢市教育プラザ富樫] 研究協議
12.12	第42回理事会 [金沢市教育プラザ富樫]
(平成21年度) 2009.8.27	第43回理事会 [兼六荘] 第44回理事会 「全日本書写書道教育研究会」団体加盟承認
12.2	第20回石川県書写書道教育研究大会[金沢市立諸江町小学校・金沢市立高岡中学校] 公開授業 小学校5年 中学校1年(2) 研究協議 講演 法水光雄先生(福井大学教授・石川県書写書道教育連盟相談役) 演題 『石川県書写書道教育連盟設立と書写書道教育の将来 一人間が人間になること・文字を手書きすること一』
12.2	第45回理事会 [金沢市立高岡中学校]
(平成22年度) 2010.9.30	第46回理事会 [兼六荘]
12.3	第21回石川県書写書道教育研究大会[金沢市教育プラザ富樫] 研究協議
12.3	第47回理事会 [金沢市教育プラザ富樫]
(平成23年度) 2011.11.2	第48回理事会 [兼六荘]

12. 8

第22回石川県書写書道教育研究大会[志賀町立下甘田小学校・志賀町文化ホール]

公開授業 小学校5年 研究協議

12. 8

第49回理事会 [志賀町立下甘田小学校]

(平成24年度)

2012. 11. 30

第50回理事会 [兼六荘]

2013.1.30

第23回石川県書写書道教育研究大会[金沢市教育プラザ富樫]

研究協議

1. 30

第51回理事会 [金沢市教育プラザ富樫]

(平成25年度)

2013. 12. 9

第52回理事会 [金沢大学サテライトプラザ]

2014.2.14

第24回石川県書写書道教育研究大会[金沢市教育プラザ富樫]

研究協議

2. 14

第53回理事会 [金沢市教育プラザ富樫]

平成25年度 石川県書写書道教育連盟役員

(☆:新 ★:役職変更) (敬称略)

役職	名 前	勤 務 先	職	備 考	
顧問	木下 公司	石川県教育委員会	教育長	石川県教育委員会教育長	
相談役	坂口 敏				
	久田 久信				
	米田 茂良				
	法水 光雄	福井大学教育地域科学部	教授		
	押木 秀樹	上越教育大学 学校教育学部	教授		
参 与	森川 登夫				
	木本 峰生				
	南 進				
	福田 教導				
	永井志津子				
	中山 武久				
	林 道子				
	石浦 義彦			石川県立松任高等学校非常勤講師	
	林 昭悦			石川県立鶴来高等学校非常勤講師	
	永江 芳悦			石川県立金沢商業高等学校非常勤講師	
名誉会長	藤 則雄		金沢大学名誉教授	石川県書写書道教育連盟 前会長	
会 長	宮下 孝晴	金沢大学人間社会学域人文学類	教授		
副 会 長	☆ 田中 功	石川県教育委員会学校指導課	教育次長兼課長	石川県教育委員会学校指導課長	
	田中 辰実	千代野幼稚園	園 長	石川県私立幼稚園協会理事長	
			校 長	金沢市小学校教育研究会(書写代表)	
		石井 秀雄	金沢市立芝原中学校	校 長	金沢市中学校教育研究会書写部長
	☆ 宇都宮 博	石川県立金沢錦丘高等学校	校 長	石川県高等学校教育研究会書道部会長	
	☆ 西田 信一	石川県立盲学校	校 長	石川県特別支援学校校長会代表	
	☆ 出雲千映子	白山市立明光小学校	校 長	石川書写の会会長	
	折川 司	金沢大学人間社会学域学校教育学類	教授	金沢大学(学校教育学類)書写書道教育担当者	
	理 事 長	中川 晃成	野々市町立館野小学校	教 諭	
	副 理 事 長	濱田美恵子	金沢市立扇台小学校	教 頭	
古本 佳世		金沢市立額中学校	教 諭		
菊田三代治		石川県立盲学校	教 頭	石川県特別支援学校教頭会代表	
監 事・理 事	白野 昌子	金沢市立伏見台小学校	教 諭		
	白石 芳子	金沢市立西南部中学校	教 諭	金沢市中学校教育研究会書写部会幹事長	
理 事(教育委員会)	☆ 諸江 真美	石川県教育センター研修課	指導主事	県教委 小・中学校(国語科書写)担当指導主事	
理 事(庶務部長)	荒家 直子	石川県教育委員会学校指導課	指導主事	県教委 高等学校(芸術科書道)担当指導主事	
理 事	★ [田中 学]	石川県立金沢中央高等学校	教 諭		
事 務 局 長	★ 谷藤真喜子	金沢市立西小学校	教 頭		
	高野 正人	志賀町立高浜小学校	校 長		
副 事 務 局 長	岩田 稚子	金沢市立高岡中学校	教 諭		
	八田 和幸	津幡町立津幡南中学校	教 諭		
庶 務 部	部長	水上真由美	石川県立金沢伏見高等学校	教 諭	
	副部長	田中 学	石川県立金沢中央高等学校	教 諭	
	部 員	佃 さえ子	白山市立松任小学校	教 諭	
		西脇 良樹	志賀町立下甘田小学校	教 諭	
		永井 重輝	金沢市立大野町小学校	教 諭	
山田 千恵	加賀市立橋立小学校	教 諭			
会 計 部	部長	西尾恵美子	能美市立浜小学校	教 諭	
	副部長	山口 雅美	金沢市立三馬小学校	教 諭	
	部 員	橋本 美紀	志賀町立上熊野小学校	教 諭	
研 究 調 査 部	部長	柿木 千鶴	白山市立松陽小学校	教 諭	
	副部長	飯田 淳一	内灘町立清湖小学校	教 諭	
	部 員	坂井 雪絵	志賀町立堀松小学校	教 諭	
		木之下知子	金沢市立杜の里小学校	教 諭	
		堀 順一郎	野々市町立野々市中学校	教 諭	
		倉下 真澄	金沢大学附属中学校	講 師	
		間野 清美	白山市立千代野小学校	教 諭	
		東山麻由美	能美市立寺井小学校	教 諭	
		金野 豊	金沢市立富樫小学校	教 諭	
		榎木 亮子	金沢市立諸江町小学校	教 諭	
		黒川なつき	金沢市立木曳野小学校	教 諭	
		☆ 山崎すなを	石川県立金沢泉丘高等学校	講 師	
	会 報 部	部長	新谷 幸一	金沢市立馬場小学校	教 諭
副部長		北野 京子	津幡町立中条小学校	教 諭	
部 員		寺井 純子	珠洲市立蛸島小学校	教 諭	
		岸 瑞代	石川県立大聖寺高等学校	講 師	
		山澤 聡美	小松市立声城中学校	教 諭	
		中辻 育代	小松市立稚松小学校	教 諭	
		吉田 美晴	金沢市立浅野川小学校	教 諭	
		水谷 清美	金沢市立田上小学校	教 諭	

石川県書写書道教育連盟規約

- 第1条（名称） 本会は、石川県書写書道教育連盟と称する。
- 第2条（本部・事務局）本会の本部を金沢大学教育学部内におき、事務局を事務局長の在勤校におく。
- 第3条（目的） 本会は、授業研究を中心として、県内の幼稚園（保育園・保育所）・小学校・中学校・高等学校・大学（短期大学・専門学校）・障害児学校等の一貫した書写書道教育と書道文化の更なる充実発展に努めるとともに、会員相互の親睦を図ることを目的とする。
- 第4条（事業） 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
（1）研究会の開催
（2）会報の発行
（3）関連する学会・研究会・内外諸機関との連絡と協力
（4）講演会・講習会の開催
（5）調査研究
（6）その他必要な事業
- 第5条（組織） 本会は、県内の幼稚園（保育園・保育所）・小学校・中学校・高等学校・大学（短期大学・専門学校）・障害児学校の教員及び本会の目的に賛同するものをもって組織する。
- 第6条（役員） 本会に、下記の役員をおく。
会長 1名 副会長 若干名 理事長 1名
副理事長 若干名 監事 若干名 理事 若干名
事務局長 1名 副事務局長 若干名
（1）事務局には、次の六部をを設け、各部とも、部長1名、副部長1名、部員若干名をおくものとする。
・庶務部 ・会計部 ・研究部 ・会報部 ・研修部 ・調査部
（2）本会に、名誉顧問・顧問・相談役・参与を推戴することができる。
（3）役員を選出と任期は、下記のように定める。
（Ⅰ）役員は理事会において選出する。
（Ⅱ）役員の任期は一か年とする。ただし、再任は妨げない。
- 第7条（理事会） 本会の理事会は、本会の運営及び事業に関する重要事項を審議決定する。
（Ⅰ）理事会は必要に応じて、会長が召集する。
（Ⅱ）理事会は、第6条における、会長・副会長・理事長・副理事長・監事・理事・事務局長・副事務局長・事務局各部長によって構成する。

第8条（会計） 本会の経費は、会費及びその他の収入をもってこれにあてる。

第9条（会計年度） 本会の会計年度は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第10条（監査） 本会の会計は、監事によって監査を受ける。

[附則]

第11条 規約の改訂は、理事会の議決を経なければならない。

平成 元年 8月 29日 制定
平成 2年 5月 18日 一部改定